

はじめに

本年 10月 10日付で投稿した「17世紀のオランダ東インド会社の活動」に対して、公文さまから、「日本人と言えば、山田長政がタイで活躍したのが 1612～30 年ごろですから、この頃周辺に日本人傭兵が登場したのも不思議はないですね。」と、コメントを頂きまして、何十年も忘れていた彼の活動を読み返しました。次に、英語のサイトで **Yamada Nagamasa** を検索すると、日本語のサイトに無い記事が出て来たので、いくつか紹介します。右の画は静岡の浅間神社蔵



ところが、10月 16日に中城さまから、「日本と世界の歴史 第14巻 17世紀」(学習研究社 昭和 45年 10月 1日 発行)の別刷りを頂き、朱印船貿易、南洋の日本町、及び山田長政の記事の要点を、第2章に記載する。

第1章. 16世紀の世界の状況

1.1 トリデシヤス条約とサラゴサ条約

大航海時代の **1494年**に**新大陸**(アメリカ)における紛争を解決する為に、スペインとポルトガルの間で**トリデシヤス条約**を結んだ。これは、図1に茶色の太い**子午線**で示すように、新領土を東西で分割するよう取り決めた。しかし、アフリカ南端の**喜望峯**を回る航路に加えて、南アメリカ南端の**マゼラン海峡**を通る航路が開発され、地球が丸い事が実証されると、アジアには東西のどちら周りでも到達できるようになり、スペインとポルトガル間の紛争が続いた。結局、1529年にサラゴサ条約で、フィリピンはスペイン領、**モルッカ諸島**をポルトガル領と相互に認めた。ポルトガルはモルッカ諸島の香辛料をヨーロッパに紹介した国であり、大国スペインに認めさせた事は成功だったが、国力が弱くて、オランダに奪われた。前回の「17世紀のオランダ東インド会社の活動」の図5でモルッカ諸島から種子島に向かってピンクの太い子午線がある、これがサラゴサ条約の分割線である。(独り言：この子午線は四国を通過しており、足摺岬はポルトガル領、室戸岬はスペイン領)



図1の出典：図説日本史通覧 帝国書院

第2章 17世紀の東南アジアの状況

「日本と世界の歴史 第14巻 17世紀」から「朱印船貿易、南洋の日本町、及び山田長政」を抜粋

2.1 朱印船制度の創始

第2章で引用している記事の著者の中田 易直氏は、一般には、朱印船は、文禄元年（1592）に豊臣秀吉によって創始されたとされている。

背景には、16世紀末に、国内に拠点をおく海賊の取り締まりが強化され、通商船が南方諸国に渡航するようになったとされている。しかし、秀吉が発行した朱印状は一通も残っていないし、秀吉が朱印船制度を創始した事の史料は皆無である。

一方、17世紀初頭（1601）の徳川家康説では、「平和な通商船の貿易を活発にするために、渡航船に家康の御朱印状を交付すると共に、相手国の国王に親書を送り、家康の捺印のある朱印状を渡航船に持たせる事を告げ、了解を得た。としており、中田 易直氏は、朱印船制度の創始は、17世紀初頭（1601）徳川家康説が正しいとしている。



2.2 朱印船の貿易

- ① 船の規模：乗組員約 300 人、船の長さ約 45m、幅 8.1m、
- ② 航海：長崎からインドシナ半島まで約 40 日、季節風を利用し、北風の冬に南下し、初夏に帰国する。
- ③ 商品：日本からの輸出品は、銀、銅、硫黄、樟脳、陶器、漆器、扇子、日本町住民には味噌、醤油
日本への輸入品は、中国産の生糸、絹織物、鹿皮、鮫皮、金、鉛、香木、
各地の日本町周辺では生糸の現地生産を進めて、日本へ輸入した。

2.3 南洋の日本町：（図2を参照）

- ① 南ベトナムのツアーン、フェフォ、カンボジアのプノンベン、シャムのアユチャ、フィリピンのマニラ郊外のデいらオ、サンミゲル
- ② 日本人住民は、フェフォ、アユチャ、サンミゲルなど大きな町には 3000 人ほど居たという。貿易の為に残留した商人、海賊や船員として渡航して住み着く者、関ヶ原の合戦や大坂の陣に敗れた浪人武士、江戸幕府の禁教令で自由を求めて移住した者たちだった。
- ③ 治外法権が与えられ、日本の法律によって生活が律せられる事が多かった。
- ④ 教会を中心に宣教師の布教が行われ、宗教活動は自由だった。

2.4 山田長政

- ① 江戸幕府が彼の名をしるのは、1621 年シャム国王が来航し、その使者にシャムの国政を担当していた長政が書状を託した時に始まる。
- ② 長政は、沼津城主の駕籠かきだった。慶長年代にシャムに移って多数の日本人軍隊を指揮して有力な存在になった。
- ③ 1628 年に国王ソントムが重病になり、王位継承問題で紛議が起こり、600 人の日本人兵を率いていた長政が、ソントム国王の臨終の際、ジェット王子を正当な王位継承者として宣言した事で、以後新国王から絶大な信任を得た。
- ④ 野心を持った摂政カラホムの陰謀で新国王は処刑され、長政は国外左遷させられ、翌 1629 年マライ半島のリゴール国王として敬遠され、1630 年にカラホムに囚われて殺害された。

第3章 朱印船貿易

文章は、主として英語のサイトで検索した記事の要約だが、シャム語の併記があって、タイ人が英文で発表したと思われる物もある。第2章と重複する記事もあるが、朱印船の始まりなどは第2章が正しいと思う。

3.1 朱印船制度の背景：

南北朝時代や戦国時代には九州・瀬戸内海方面の武士や海賊が中国、朝鮮沿岸を荒らしまわり、倭寇と恐れられた。16世紀後半になるとポルトガル船が日本に来航するようになって海外への関心が高まり、東南アジア方面にまで進出する日本人も現れた。天下統一による政権が生まれると交易統制が必要となり、豊臣秀吉は日本人の海外交易を統制し、倭寇を禁圧する必要から、**1592年**に初めて朱印状を発行してマニラ、アユタヤ、パタニなどに派遣したとされるが、この時のことはあまり資料がない。

3.2 朱印船

朱印船として用いられた船は、初期には中国式のジャンク船が多数であった。後にはジャンク船にガレオン船の技術やデザインを融合させた独自の帆船が登場した。東南アジア貿易が盛んであった時には、硬くて年輪のない木材で造船技術も優れていたシャムの**アユタヤ**で大型の船が大量に注文・購入された。

図3の出典：英語版朱印船 Red Seal Ships



3.3 朱印船制度の創設

関ヶ原の戦いで全国統一した徳川家康は海外交易に熱心で、1600年豊後の海岸に漂着したオランダ船の航海士ウィリアム・アダムスや、ヤン・ヨーステンらを外交顧問として採用し、ガレオン船を建造させた。

1601年以降、安南、スペイン領マニラ、カンボジア、シャム、パタニなどの東南アジア諸国に使者を派遣して外交関係を樹立し、**1604年**に朱印船制度を実施した。これ以後、1635年まで350隻以上の日本船が朱印状を得て海外に渡航した。

朱印船は必ず長崎から出航し、帰港するのも長崎であった。なお、明は日本船の来航を禁止していたので、(ポルトガル居留地マカオを除けば)朱印船渡航先とはならず、朝鮮との交易も対馬藩に一任されていたので、朱印状は発行されなかった。

朱印船は、16世紀末から17世紀初頭にかけて日本の支配者の朱印状(海外渡航許可証)を得て、海外交易を行った船。

朱印状を携帯する日本船は、日本と外交関係があったポルトガル、オランダ船や東南アジア諸国の支配者の保護を受けることができた。

琉球が150年ほど早かった事が分かる。



出典：シルクロード歴史地図 東光書店

第4章 山田長政

4.1 山田長政は静岡県沼津で 1590 年に生まれ、沼津の殿様の駕籠かきだった。彼は朱印船の時代に東南アジアとの交易に参加し、1612 年頃に現・タイ国のアユタヤ王国に定住した。約 1000 人の日本町（タイの言葉で *Ban Yipun*）で、町民の構成は、商人、キリスト教に改宗して迫害されて逃れてきた者、1600 年の関ヶ原の戦い又は大坂の役(1614-15)で敗れて主君を失った浪人（失業した元侍 unemployed former samurai）達で、移住後にポルトガル人でイエズス会の **António Francisco Cardim** 司教に 1627 年にアユタヤ市で洗礼を受けた 400 人の日本人キリスト教徒もいる。

4.2 アユタヤの日本町は商取引が活発で、日本からの刀・漆塗り箱・高品質和紙などの手工芸品を持ち込み、東南アジアの鹿皮を中心に日本に輸出していた。鹿皮は主に武具・防具に使われた。オランダ人は、「日本人はオランダ東インド会社の独占的商業活動を狙っている」と記録している。ナツメグなどの香辛料の取引記録はない。

4.3 山田長政は、1620 年から海賊 **Privateer**（注 1）を始めたと言われている。具体的には、オランダの東インド植民地バタヴィア（図 3 のジャカルタ、図 4 のバタヴィア）及びその周辺のオランダ船を攻撃し、略奪する事であり、16 世紀末にイギリスでエリザベス女王（注 2）の承認の下で**私掠船**がスペインの艦隊を攻撃して無敵艦隊に勝利したが、指揮官は海賊ドレイクと呼ばれている通り、海賊である。注 2：当時のイギリスにはスコットランドは含まれていないので、1 世や 2 世は間違い。当時は Queen Elyzabeth of England and Ireland, 現在は Queen Elyzabeth of United Kingdom（注 1）Privateer は意味は海賊船（Pirate Ship）、**私掠船**は政府公認の海賊船だが西洋史用語（中城さま）

4.4 アユタヤ町は、アユタヤ王国の中で国王の下の軍隊ではないが、日本人の自主的軍事活動部門 (Krom Asa Yipun)としてアユタヤ王から重要視されていた。

4.5 山田長政は、莫大な財宝をオーストラリアの東海岸のタウンズヴィルの沖合のマグネティック島に埋蔵していると言う噂は消えていないが、場所がアサっての方角にあり、今ではあり得ない事と考えられている。

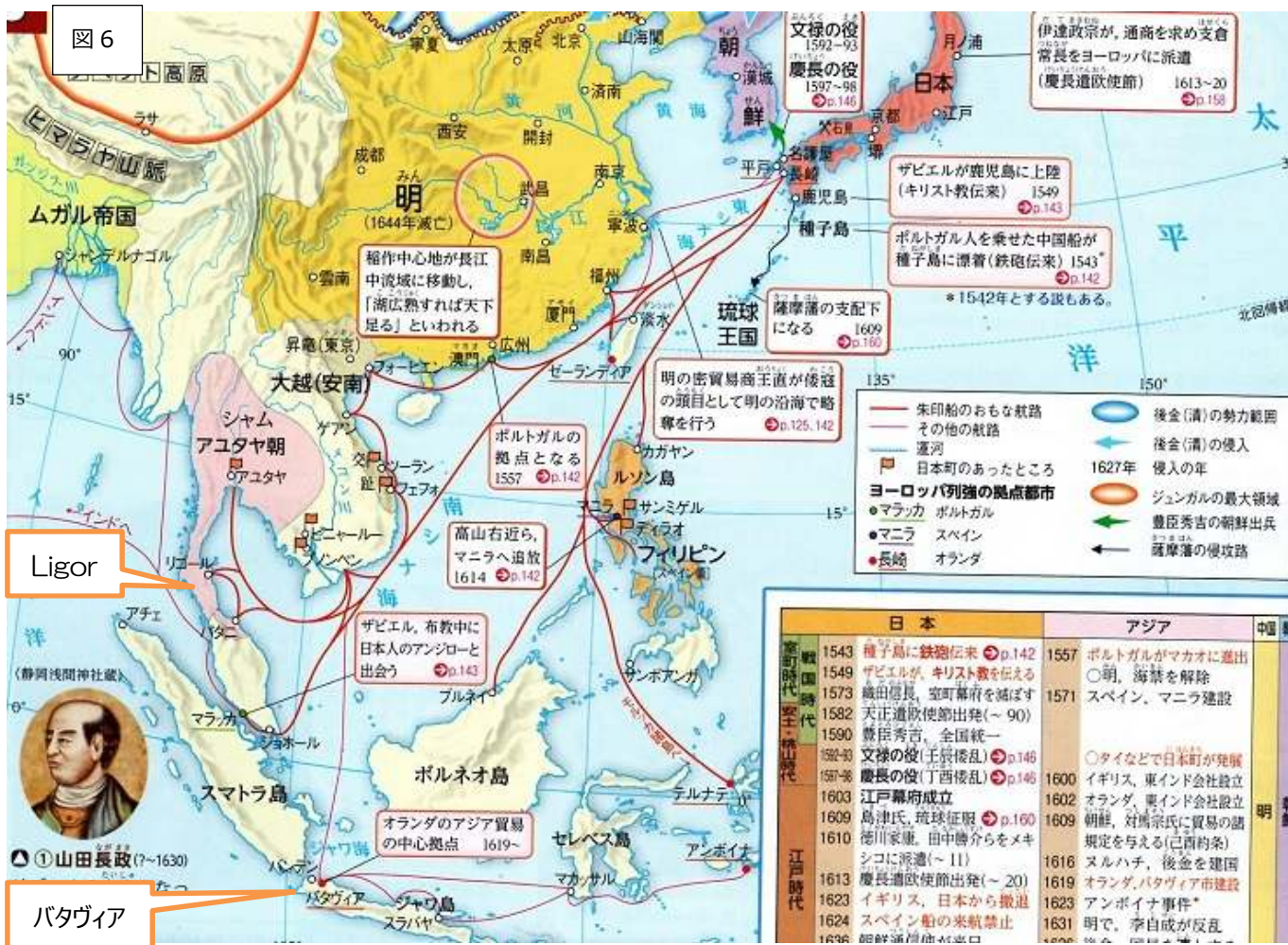
図 5、の出典：
図説日本史通覧 帝国書院



図 2、図 4、図 5、図 6 は地名に違いがあるが、言語の違いによる。

第5章 朱印船の主な航路（赤）と日本人町（赤旗） 16～17世紀の東南アジアの地図 出典：図説日本史通覧 帝国書院

図6の出典：図説日本史通覧 帝国書院



シヤム王国のアユタヤ朝の南はマラッカ王国があり、マラッカ海峡を通る航路は海のシルクロードで当初はアラブ人商人がモルッカ諸島の香辛料を独占していた。

現在でもインドネシア語やマレー語にはアラビア語を語源とする単語が多く存在する。

第6章 山田長政の軍隊

6.1 山田長政は、1620年から Privateer 私掠船活動を始めたと言われている。具体的には、オランダの東インド植民地バタヴィア（現在のジャカルタ）及びその周辺のオランダ船を攻撃し、略奪する事であり、16世紀末にイギリスでエリザベス女王の承認の下で私掠船がスペインの艦隊を攻撃して無敵艦隊に勝利したが、指揮官は海賊ドレイクと呼ばれている通り、海賊である。海賊ドレイクはエリザベス女王から貴族に登用され、サー・ドレイクになった。

6.2 アユタヤ日本町は、アユタヤ王国の中で軍事技術に優れ、よく組織されていて、王国の重要な軍事活動部門でもあった。アユタヤ王から「日本人ボランチャ部隊（シヤム語で、Krom Asa Yipun）と呼ばれていた。」

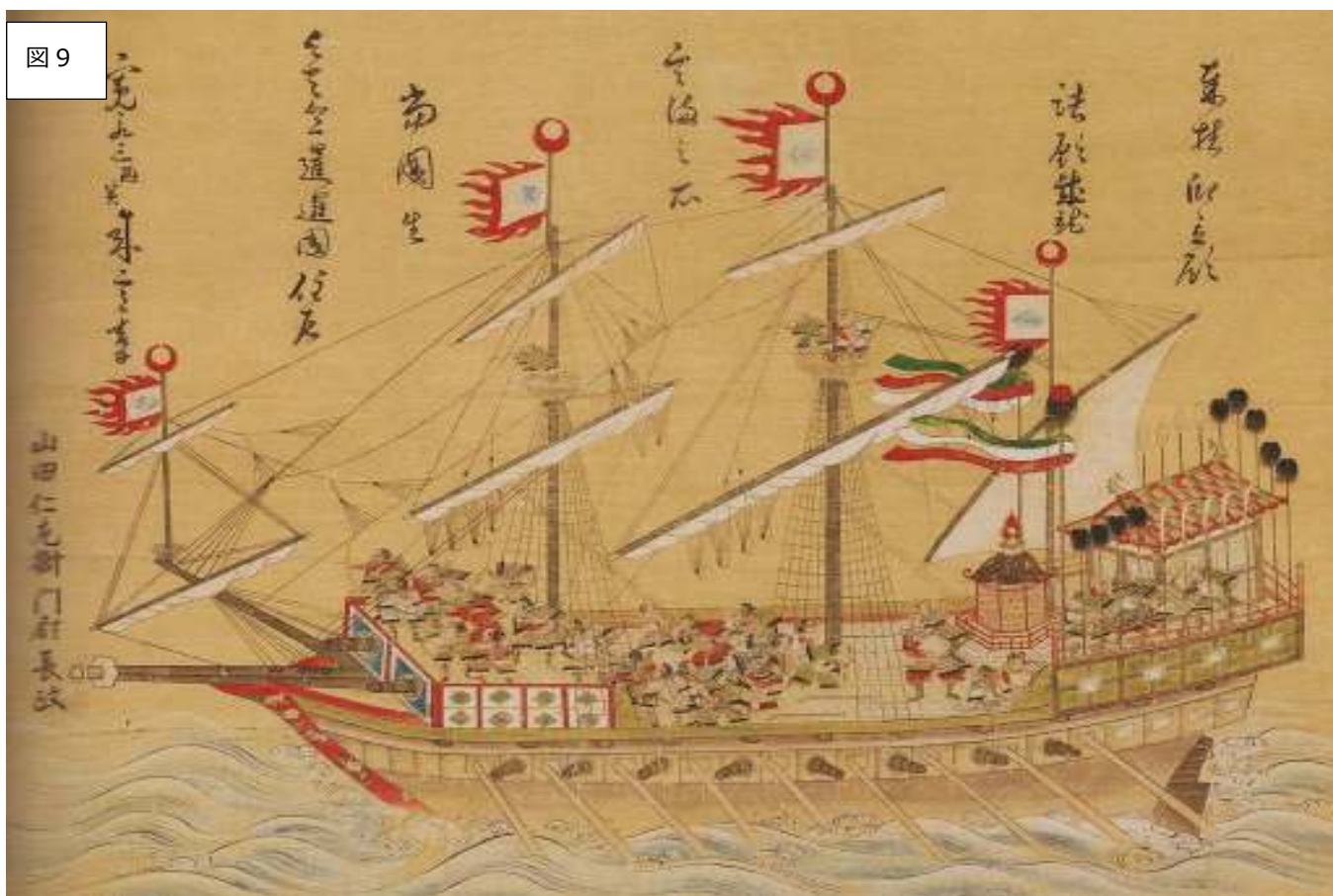
6.3 山田長政は、15年間でタイの下級貴族(Khun)から上級幹の(Ok-ya)に昇格し、アユタヤ王国の郊外の日本人町の首長に就任し、オークヤー・セーナピムック *Ok-ya Senaphimuk* (*เอกญาเสนาภิรมย์*)の官位を得た。この立場で日本人の軍隊のリーダーとして日の丸の旗を掲げてソナム国王軍の軍事活動を支援した。進軍は成功裡に進み、1630年には300人の侍を率いて半島南部のLigo (図6、現在のナコンシータマラート)を征服した。

図8



図8は、
アユタヤ王国の山田長政軍の船

図9



Siam (シャム、語源は黄金の土地という意味だが現在のタイを呼ぶ) に来て12年以上が経った1624年に、山田長政は自分の船で日本を訪問し長崎で鹿皮を売っている。彼は、朱印状を得ようと日本に3年間滞在したが、単なる「外国船」と判定されて叶わず、1627年に日本を去った。長政は、1626年に軍艦の一つの絵を静岡の出身地の寺に奉納している。その絵は火災で焼失したが、写し絵が残っている(図9)。それによると、船は西洋式の艀装マストと18門の大砲を備えており、船員は侍の武具を身に着けている。

イギリス人の記事と思われるのは、「1605年にイギリス人の有名な探検家ジョン・デイヴィスがシャムの海岸沖で日本の海賊に襲われて死亡した。日本人に殺された最初のイギリス人になった。」と言う記事です。山田長政の軍隊はバタビア(現・ジャカルタ)でオランダ東インド会社と交流があり、兵を派遣している、これは傭兵とされていると思う。

以上